九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典とヒエロニュムスによるラテン語訳の日本語対訳 ： 第１説教

加藤, 哲平
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/7173422

出版情報：言語文化論究. 52, pp.125-153, 2024-03-15. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典とヒエロニュムスによるラテン語訳の日本語対訳：第１説教

加　藤　哲　平

解説

３世紀に活躍したギリシア教父オリゲネスは膨大な量の著作を残した。その全体は、一説に800巻（ヒエロニュムス『書簡33』）とも、2000巻（ヒエロニュムス『ルフィヌス駁論』2.22が伝えるエウセビオスの算定）とも、あるいは6000巻（エピファニオス『パナリオン』64.63.8）とも言われている。これらの著作は、現代の研究者たちによって６つのジャンル、すなわち、批判的著作（スコリアやヘクサプラなど）、説教、注解、護教的著作、教義的著作、そして書簡に分類されている[1]。

ただし、オリゲネスの著作のかなりの部分は失われてしまっている。これは、オリゲネスの死後に始まった所謂「オリゲネス主義論争」において、彼の神学思想が異端と見なされたことにより、その著作が焚書の憂き目に遭ったり、写本の複写が永く禁止されたりしたためである[2]。それゆえに、現存するオリゲネスの著作のうち、原典であるギリシア語本文がある程度残っているものはわずかである。すなわち、説教では『エレミヤ書説教』（詳しくは後述）、『サムエル記上説教』（28:3-25「エン・ドルの口寄せ女」の部分）、『詩篇説教』（15篇、36-38篇、67篇、73-77篇、80篇、81篇に関する部分）、『ルカ福音書説教』（第35説教のみ）が、注解では『ヨハネ福音書注解』（全32巻中９巻分）と『マタイ福音書注解』（全25巻中８巻分）が、護教的著作では『ケルソス駁論』と『ヘラクレイデスとの対話』が、教義的著作では『諸原理について』（3.1と4.1-3の部分）、『祈りについて』、『殉教の勧め』、『過越について』が、そして書簡では『アフリカヌスへの手紙』（往復書簡全体がダニエル書のカテーナに収録）と『グレゴリオス・タウマトゥルゴスへの手紙』などがある。

これら以外のオリゲネスの著作は、ギリシア語原典ではなく、そのラテン語訳のかたちで伝えられている。そうしたラテン語訳のほとんどは、４世紀後半から５世紀にかけて活動したラテン教父ルフィヌスとヒエロニュムスによって作成された。ヒエロニュムスはヘブライ語聖書を原典から翻訳し、「ウルガータ」と呼ばれるラテン語訳聖書の基礎を作った聖書翻訳者として名高いが、彼もルフィヌスも、オリゲネスやエウセビオスなどのギリシア教父たちの著作をラテン語世界に紹介したギリシア語翻訳者でもあった。この二人は青年時代に留学先のローマで出会い、机を並べて共に学んだ友人同士であった。しかし、先述の「オリゲネス主義論争」において、もともとはオリゲネスに心酔していたヒエロニュムスがそれまでの立場を翻して反対派にまわり、一方でルフィヌスは変わらずオリゲネスに忠実であり続けた結果、両者の関係は決裂してしまった。これ以後の二人は、ルフィヌスが410年に先に亡くなるまで（ヒエロニュムスの死去は420年）、相手をこき下ろす論駁書を書き続けたのだった[3]。

現存するルフィヌスによるオリゲネスの著作のラテン語訳としては、『創世記説教』、『出エジプト記説教』、『レビ記説教』、『民数記説教』、『ヨシュア記説教』、『士師記説教』、『詩編説教』、『雅歌注解』、『ローマ書説教』、『諸原理について』がある。一方で、ヒエロニュムスによるラテン語訳としては、『雅歌説教』、『イザヤ書説教』、『エレミヤ書説教』、『エゼキエル書説教』、『ルカ福音書説教』、『諸原理について』がある。また翻訳者不明のラテン語訳として『マタイ福音書注解』もある（ヒエロニュムスは『著名者列伝』100において、ポワティエのヒラリウスがオリゲネスの『ヨブ記説教』をラテン語に翻訳したと伝えているが、これは現存しない）。

以上のように、現存するオリゲネスの著作群とは、ギリシア語原典として残っているものとラテン語訳として残っているものの総体であるわけだが、実は、ギリシア語原典とラテン語訳の両方が残っている著作はそれほど多くない[4]。翻訳者不明の『マタイ福音書注解』の一部（12-17巻）はその一例である。ルフィヌスのラテン語訳がギリシア語原典と共に存在する著作としては、『諸原理について』と『詩編説教』がある。前者については、４世紀にカイサリアのバシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスが編んだ詞華集『フィロカリア』に収録されたギリシア語原典の一部（3.1と4.1-3）が、ルフィヌスによる全訳と重複している[5]。『詩編説教』は、従来は36-38篇に関する９つの説教のラテン語訳のみしか存在しなかったが、2012年にバイエルン州立図書館で、36篇に関する説教を含む大量のギリシア語原典が記された写本（Codex Monacensis Graecus 314）が発見されたことにより、比較が可能になった[6]。一方で、ヒエロニュムスのラテン語訳がギリシア語原典と共に存在する著作としては、『諸原理について』（翻訳の全体は現存しないが、『書簡124』で断片的に引用されている）[7]と『エレミヤ書説教』がある。

中でも『エレミヤ書説教』は、ギリシア語原典とラテン語訳の並行箇所が豊富に残っているため、聖書解釈者としてのオリゲネスの実像のみならず、ギリシア語翻訳者としてのヒエロニュムスの実像をも明らかにできる可能性を秘めている点で、極めて重要である。これまでのオリゲネス研究において最も重視されてきたのは、何といっても彼の思想を直接伝えるギリシア語原典であった[8]。ルフィヌスやヒエロニュムスらによるラテン語訳は、ギリシア語原典が存在しない場合に、オリゲネスの記述を間接的に知るための次善の策として利用されてきたにすぎない。すると、ギリシア語原典とラテン語訳が揃っているときのラテン語訳など、オリゲネス研究のためにはほとんど用をなさないのだった。しかしながら、これはあくまでオリゲネス研究における評価であって、ひとたび分析の対象をヒエロニュムスにすれば、『エレミヤ書説教』は、翻訳者としての彼の実像を教えてくれる豊かな情報源に早変わりするのである。言い換えると、原典と翻訳の並行箇所を仔細に比較検討することのできる『エレミヤ書説教』のおかげで、ギリシア語翻訳者ヒエロニュムスに関するさまざまな問い ── 彼の翻訳は原典に忠実な訳なのか敷衍の多い訳なのか、彼の翻訳は（たとえばルフィヌスの翻訳と比べて）どのような特徴を持っているのか、彼はオリゲネスの思想をどのように理解していたのか ── に対する答えを私たちは得ることができるかもしれないのである。このような観点からの研究は、ヒエロニュムスをヘブライ語聖書の翻訳者としてばかり見なしてきたこれまでのヒエロニュムス研究に対しても、一石を投じるものとなるだろう。

『エレミヤ書説教』は、内容的には教会の一般信徒を対象とした比較的平易な一作である。241年から244年の間に発表されたものと考えられる[9]。これは50歳代になったオリゲネスが、アレクサンドリアで巻き込まれた教会政治の嵐から距離を置き、新天地カイサリアにおいて集中的に説教を行った時期に当たる。説教の時系列は、知恵文学（詩篇、ヨブ記、箴言、コヘレト書、雅歌）、預言書（イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書）、そして歴史書（七書、列王記上）と考えられている[10]。こ

の説教群の後に、晩年の大作『ケルソス駁論』が書かれることになる。

直接証言としては2つのギリシア語写本、すなわち、S = Codex Scorialensis Ω-III-19（11-12世紀）と V = Codex Vaticanus gr. 623（16世紀）がある。V 写本は S 写本の写しであるため、資料価値としては S 写本の方が高い。間接証言としては、古代の引用（パンフィロスとエウセビオス『オリゲネス擁護』のルフィヌスによるラテン語訳と、『フィロカリア』所収の2つのギリシア語断片）、預言書のカテーナ（10世紀の Chisianus R. VIII. 54 と 9 世紀の Vat. Ottobonianus gr. 452）、そしてヒエロニュムスのラテン語訳が残されている。

ヒエロニュムスが『エレミヤ書説教』を翻訳したのは、オリゲネスが説教をしてから約140年後の380年頃、コンスタンティノポリスにおいてだったと考えられる。これは、彼がローマやベツレヘムで華々しく活躍するより前に、アクイレイア、アンティオキア、カルキス砂漠といった東方世界を遍歴していた時代の最後のことであり、著作家・翻訳家としてのキャリアの初期に当たる[11]。『エレミヤ書説教』の翻訳後に着手された『エゼキエル書説教』には、ヒエロニュムスによる訳者序文が付されているが、それによると、彼は「混乱した順序で翻訳したエレミヤ書への14の説教のあと、中断してからエゼキエル書へのこれらの14の説教をも口述した」のだという[12]。この「中断」には、同序文でヒエロニュムスがぼやいているように、「たくさん読書することを我慢できずに引き起こした目の痛み」と「筆記者の不足」が影響しているのだろう。

ヒエロニュムスによる『エレミヤ書説教』のラテン語訳は中世において人気があったため、数多くの写本が現存するが、まだ信頼できる校訂版は存在しない。W.A. Baehrens による先駆的な研究によると、ラテン語訳写本は基本的に、起源を共にする A と B の 2 グループに分けることができるという[13]。グループ A は 9 世紀の写本を筆頭に比較的古い写本群であり、本翻訳で底本とした Migne 版もこちらを採用している。グループ B は12世紀から15世紀の写本群である。これらの他には、9世紀のラバヌス・マウルス『エレミヤ書注解』中の長めの抜粋（R と呼ばれる）があり、これは11世紀の Arundel Codex 45（大英図書館）に残されており、グループ A と B よりも優れた読みを保存している。さらに、ヒエロニュムス自身の『エレミヤ書注解』にも、オリゲネスからの影響が見られる。

『エレミヤ書説教』は、諸説あるが、もともと45本の説教から成っていたとされる（カッシオドルス『綱要』3.2-3）。このうち現存するのは、ギリシア語テクストが20本とラテン語訳でのみ残るテクスト2本の計22本と、『フィロカリア』所収の第39説教のギリシア語断片である。ギリシア語テクストの20本のうち12本には、ラテン語訳の並行箇所が存在する（すなわち、ラテン語訳は計14本）。これを図にしたものが、以下の表1である[14]。

ヒエロニュムスによる『エレミヤ書説教』の翻訳は、概して原典に忠実だが、ときに自由なところも見られると評価されている。ルフィヌスは、ヒエロニュムスの訳した『エレミヤ書説教』を読み、三位一体に関する議論がほとんど見られないことに基づいて、ヒエロニュムスによる改竄を疑った（『ヒエロニュムス駁論』2.31.15）。現代の研究者では、Erich Klostermann が、このラテン語訳には「読者の理解を助けるための敷衍、省略、挿入と共に、表現の強化と誇張、画家の色塗り、難解さの優雅な隠蔽、様式上の付加、虚栄心と学識ある衒学」が見られると主張している[15]。第 2 説教を集中的に分析した Theodore A. Bergren らによれば、ヒエロニュムスはギリシア語原典の「濃縮」、「合理化」、「拡張」、「修正」、「(新しい要素の）導入」などをすることで、原典を字義的にラテン語訳するのではなく、その基本的な意味を伝えようとしていたのだという[16]。最新のドイツ語対訳を出版した Alfons Fürst と Horacio E. Lona らも、教義的な部分でのテクスト改変はわずかだが、オリ

（表１）

説教番号	ヒエロニュムス訳の番号	聖書箇所
1	1	エレ 1:1-10
2	13	エレ 2:21以下
3	–	エレ 2:31-?
4	14	エレ 3:6-11
5	–	エレ 3:22-4:8
6	–	エレ 5:3-5
7	–	エレ 5:18以下
8	5	エレ10:12-14
9	6	エレ11:1-10
10	8	エレ11:18-12:9
11	7	エレ12:11-13; 13:1-11
12	9	エレ13:12-17
13	10	エレ15:5-7
14	11	エレ15:10-19
15	–	エレ15:10; 17:5
16	12	エレ16:16-17:1
17	4	エレ17:11-16
18	–	エレ18:1-16
19	–	エレ20:1-7
20	–	エレ20:7-12
Lat. 1	3	エレ27:23-29（50:23-39 MT）
Lat. 2	2	エレ28:6-9（51:6-9 MT）
39		エレ51:22（44:22 MT）

ゲネスのシンプルな言葉遣いがエレガントなラテン語で取り繕われてしまっているところがあると指摘している[17]。ただし、ヒエロニュムスが翻訳の底本として用いた『エレミヤ書説教』の写本は、現存するギリシア語写本であるＳ写本よりもはるかに古いので、ときにより優れた読みを保存していることにも注意すべきである[18]。

本稿で訳出した「第１説教」は、エレ 1:1-10を題材とした比較的長めの一作である。第１節から第４節はエレミヤ書の「前文」（1:1-3）に基づいた説教であり、それによると、神は予告なく裁きを下すのではなく、ある程度の猶予や容赦を与えてくれるという人間愛を持っているので、エルサレムに捕囚という裁きが下されたときにも、神は聞く耳を持つ者たちが悔い改められるようにエレミヤを遣わしたのだという。第５節では、エレミヤにもたらされた主の言葉が他の預言者と比べて特別なものであることが語られる。第６節では、エレミヤ書の冒頭で語られていることがエレミヤを指すのか、あるいは予型論的解釈に基づいてイエスを指すのかについての議論が展開される。第７節では、架空の論敵からの批判や質問に対し、寓意的解釈を用いることによって、エレミヤがイエスおよび神の予型となっていることが示される。第８節から第９節では、「私は語ることができない」（エレ 1:6）と述べる者を神と見なしてよいのかという架空の論敵からの疑問に対し、回答が与えられている。第10節から第11節では、「形作る」（エレ 1:5）という語と「作る」という語の違いが説明され、エレミヤが生まれる前から聖別されていたことが示される。第12節では、預言者とし

てのエレミヤについて説明される。第13節では、「私は若い」（エレ 1:6）という一節と、預言者の受ける苦しみに関して議論が続く。第14節では、エレミヤとイザヤの違いと、人間の内部にある根絶するべき悪徳が語られる。第15節では、「根絶すること」と「破滅させること」と「滅ぼすこと」の区別について説明される。そして第16節では、神が先に「悲惨であるように見えること」を行い、その後に「喜ばしいこと」を行うことが示された後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

オリゲネス『エレミヤ書説教』第 1 説教（エレ 1:1-10）

凡例

- ギリシア語底本は、Alfons Fürst and Horacio E. Lona (eds.), *Origenes, Die Homilien zum Buch Jeremia* (OWD 11; Berlin: De Gruyter, 2018) を用いた。これは、Erich Klostermann and Pierre Nautin (eds.), *Origenes, Jeremiahomilien, Klageliederkommentar, Erklärung der Samuel- und Königsbücher* (2nd ed.; GCS 6 = Origenes Werke 3; Berlin: Akademie Verlag, 1983) に依拠している。
- ラテン語訳底本は、Jacques-Paul Migne (ed.), *Origenis Opera omnia* (PG 13; Paris, 1862), 253-606を用いた。同テクストが Jacques-Paul Migne (ed.), *S. Eusebii Hieronymi Opera omnia* (PL 25; Paris, 1845), 583-692にも収録されているが、節区分が異なるためにこちらは底本としなかった。
- ギリシア語原典に対しラテン語訳が異なっている箇所では、ラテン語訳に基づく日本語訳に下線（__）を引いた。日本語訳としては同じ文章でも、ギリシア語原典とラテン語訳の文構造が異なっている箇所も同様である。
- ギリシア語原典にしか存在せず、ラテン語訳では欠落している箇所では、ギリシア語に基づく日本語訳に波線（‿）を引いた。
- 丸括弧（　）は聖書箇所など、山括弧〈　〉はラテン語訳から復元されたギリシア語テクスト、亀甲括弧〔　〕は訳者による補足を指す。

いつエレミヤは預言をし始めたのか、そしてどの王のときに彼は預言をしたのか、そしてそのあとで何が彼に対し主から言われたのか。

第１節

（ギリシア語）

神は善い行いへの準備はできていますが、罰するに値する者たちを罰することは躊躇う方です。沈黙のうちに、予め警告することなしに、彼によって裁きを下された者たちに罰を科すことができるにもかかわらず、決してそれをしないのでした。それどころか、裁きを下すときでさえ彼は語り、その語りは、裁きを下されるべき者を裁きから引き離すことに目的を置いているのです。それらの例は聖書からたくさん取ることができますが、私たちが先に提示された朗読の目標にも行くためには、目下手に入れるものは僅かで〈十分です〉。実際ニネヴェの者たちは罪人となり、神によって「あと三日でニネヴェは破滅させられることになる」（ヨナ 3:4）と裁きを下されました。神はニネヴェを沈黙のうちに滅ぼすことを望まず、それどころか彼らに悔い改めと回心の場所を与えながら、ヘブライ人の預言者を遣わしました。それは、彼が「あと三日でニネヴェは滅ぼされることになる」と言うとき、裁きを下された者たちが裁きを下されるのではなく、むしろ悔い改めることで神の憐れみを得るためでした。ソドムとゴモラの住人たちも裁きを下されました。それはアブラハムに対する神の言葉から明らかです（創18）。しかし、それにもかかわらず天使たちは自分たちの仕事を行いました。彼らは、救われることを望まない者たちが救われることを望んでいたので、ロトに対して「ここにあなたの婿、息子、娘など誰かいるか」（創19:12）と言ったのです。天使たちは、その者たちがロトと共に来ることはないと知らなかったわけではありませんが（創19:14以下）、彼らを遣わした御方の「慈しみと人間愛」（テト 3:4）の行為を行ったのです。

（ラテン語訳）

神は善い行いへの準備はできていますが、罰するに値するところの者たちを罰することは躊躇う方です。沈黙のうちに、来たるべきことの警告なしに、彼はかつて罰に値する者たちとして裁きを下した者たちを罰することができるにもかかわらず、決してそれをしないのでした。それどころか、裁きを下すときでさえ彼は自分自身にいつも言おうとしていたことを言うのでした。それは、過ちゆえに裁きを下されていた者たちが悔い改めゆえに裁きから解放されるためでした。それらの例は聖書からたくさん取ることが可能ですが、目下の偶然見つけたもので十分です。そうすれば、私たちはすでに朗読されたところの考察に行くことができます。ニネヴェの者たちは罪人として、神によって、「あと三日でニネヴェは滅ぼされることになる」（ヨナ 3:4）と裁きを下されました。神は裁きを下された者たちを沈黙と共に罰することを望まず、それどころか彼らに悔い改めと回心の場所を与えながら、諸民族にヘブライ人たちの預言者を遣わしました。それは、彼が「あと三日でニネヴェは滅ぼされることになる」と言うとき、裁きを下された者たちが死ぬのではなく、むしろ悔い改めを行うことで神の憐れみを得るためでした。ソドムとゴモラの住人たちも今や破滅に定められました。それはアブラハムに対して言われた神の言葉からも明らかです（創18）。しかし、それにもかかわらず天使たちは自らのものである仕事を行いました。彼らは、自らが救いに値しないと判断した者たちを救うことを望んでいたので、次のことなどをロトに対して言ったのです、「ここにあなたの婿、息子、娘など誰かいるか」（創19:12）と。天使たちは、その者たちがロトについてくることはないと知らなかっ

たわけではありませんが（創19:14以下）、自らと、彼らを遣わした御方の人間への慈しみと愛（テト 3:4）を同じように示したのです。

第２節

（ギリシア語）

同じようなことを、エレミヤに関する諸々のことについてもあなたがたは見い出すでしょう。彼の預言の時代 ── 彼がいつ始め、いつまで預言したのか ── が記録されています。それから読者は、もし朗読に注意を払わず、また書かれていることの朗読の意味を調べないならば、それは歴史であると言うでしょうし、またエレミヤがいつ預言を始め、預言した後にどれくらいの時代までに預言をやめたのかが記録されていると言うことでしょう。では、この歴史は私にとって何なのでしょうか。読んでみると、彼は「ユダ王、ヨシヤの息子アモスの日々に、彼の王国の第十三年に」預言し始めたのだと私は学びました。それから、「ユダ王ヨシヤの息子ヨヤキムの日々に現れ」、預言したのは「ユダ王ヨシヤの息子ゼデキヤの第十一年目の終わりまで」でした。さらに、三人の王たちにわたって彼の預言は続き、それは「第五の月のエルサレムの捕囚まで」だったと私は学びました（エレ 1:2 以下）。では、もし私たちが朗読に注意を払うならば、これらのことから私たちは何を学ぶのでしょうか。

（ラテン語訳）

これらのことのいわば同じようなことが、エレミヤにおいても書かれているということを私たちは見い出します。というのも、彼の預言の時代 ── 彼がいつ預言し始め、いつまでしたのか ── が記録されています。それゆえに、聖書を読む者は、もし朗読に慎重に注意を払い、また書かれていることの意味を調べるならば、それはエレミヤがいつの時代に預言を始め、またいつ預言を完成させたか、歴史の標題から言うことができます。では、歴史の時代とは私にとって何なのでしょうか。読んでみると、彼は「ユダ王、ヨシヤの息子アモスの日々に、彼の王国の第十三年までに」預言し始めたのだと私は学びました。それから、「ユダ王ヨシヤの息子ヨヤキムの日々に彼は預言した」、「ユダ王ヨシヤの息子ゼデキヤの第十一年目の終わりまで」。さらに読んでみると、三人の王たちにわたって彼の預言は続き、それは「第五の月のエルサレムの捕囚まで」だったと私は学びました（エレ 1:2 以下）。では、もし私たちが朗読に注意を払うならば、これらのことから私たちは何を教えられるのでしょうか。

第３節

（ギリシア語）

神はエルサレムに、その罪により裁きを下しました。そして裁きが下されると、彼らは捕囚へと残されました。しかしながら、人間を愛する神は、時が定められると、捕囚時の第三の王国に、この預言者をも遣わしたのです。それは、それ〔捕囚〕を考えようとする者たちが預言的な言葉を通じて悔い改めるためでした。彼は預言するように預言者を遣わしたのでした、第一の王の後、第二の王のときにも、そして第三の

（ラテン語訳）

神はエルサレムに、それが作った罪により裁きを下しました。そしてそれは、彼らが捕虜にされたままになるという最終判決でした。しかしながら、彼は人間を愛する方であり、誰も滅ぶことを望まないので、略奪の時が差し迫る前に、この預言者をも遣わしたのです。それは、彼らが彼の言葉を通じて悔い改めへと向けられるためでした。彼は同じ者を第一の王の後、第二の王のもとでも遣わし、第三の王のもとにも

王のときにも、その捕囚のときまで。というのも、怒りに遠い神は、捕囚のいわば一日前にも猶予を与え、聞く耳を持つ者たちが悔い改めるように促したのです。それは彼が捕囚の哀しみを止めるためでした。そこから、次のように書かれています。「エルサレムの捕囚まで、第五の月まで、エレミヤは預言した」（エレ 1:3）、と。捕囚が始まりました。すると依然として彼は預言しており、次のようなことを言っていました。「捕虜になりなさい、少なくともそのようにして悔い改めなさい（マコ 1:15）。なぜなら、あなたがたが悔い改めれば、捕囚の諸々のことは進捗せず、むしろ神の恵みがあなたがたに実現されるでしょうから」。したがって、預言の時代を保存している記録から、私たちは有益なことを得ています。つまり、ご自身の人間愛に従って、神は聞く耳を持つ者たちが捕囚の諸々の苦難を経験することのないように促したのです。

そうしたことは私たちについても相当します。もし私たちが罪を犯したら、私たちもまた捕虜となるおそれがあります。というのも、「このような者をサタンに引き渡す」（Ⅰコリ 5:5）ことは、エルサレム出身者たちをネブカドネツァルに引き渡すことと何も変わらないからです。彼らが罪ゆえに彼に引き渡されたのと同じように、私たちも罪ゆえにサタンに引き渡されるのです、すなわちネブカドネツァルに。そして「彼らを私はサタンに引き渡した。それは冒涜しないように彼らが教えられるためだった」（Ⅰテモ 1:20）。使徒は他の罪人たちについて述べています。

第 4 節

（ギリシア語）

したがって、見てください、罪を犯すことがどれほど悪いことかを。なぜなら彼らは、神によって見捨てられた者たちの魂を捕虜とするサタンに引き渡されるからです。とはいえ、神はご自身が見捨てた者たちを理由なしに、また軽率に見捨てることはありません。というのも、遣わしたのでした。なぜより多くのことを〔彼はしたのでしょうか〕。今や捕囚は差し迫っていたのです。そしてさらに神は勧告し、いわば一日前にも悔い改めの場所を認めていました。そこから、次のように書かれています。「エルサレムの捕囚まで、そして第五の月まで、エレミヤは預言した」（エレ 1:3）、と。今や、敵どもの枷が両手を縛っており、そしてそれにもかかわらず、いわば次のことを神は言っていました。「見よ、捕虜とされなさい。遅れてだとしても、悔い改めを行いなさい。私に求めなさい。そうすれば私はあなたたちを容赦しよう。私は、私が与えた捕囚から〔あなたがたを〕取り除くことができるのです」。したがって、預言の時代を保存している記録から、私たちは何らかの必要なことを得ています。つまり、ご自身の寛大さに従って、神は過ちがやむときに捕囚もまた終わるように、常に人々を救済へと促したのです。

そうしたことを私たちについても私たちは理解することができます。もし私たちが罪を犯したら、私たちもまた捕虜となるおそれがあります。というのも、「罪人たちがサタンに引き渡される」（Ⅰコリ 5:5）ことは、ユダヤ人たちがネブカドネツァルに引き渡されたことから何も変わらないからです。たびたびの不敬虔ゆえに、神が彼らを敵に引き渡したように、私たちは自分が為した罪ゆえに、霊的なネブカドネツァルに引き渡されるのです。そして「彼らを私はサタンに引き渡した。それは冒涜しないように彼らが学ぶためだった」（Ⅰテモ 1:20）。使徒は他の罪人たちについて述べています。

（ラテン語訳）

したがって、考えてください、罪を犯すことがどれほど悪いことかを。なぜなら彼らは、神によって見捨てられたところの者たちの魂を捕虜とするサタンに引き渡されるからです。とはいえ、神はご自身が見捨てた者たちを理由なしに、また裁判なしに見捨てることはありません。

彼が葡萄畑に雨を送っても葡萄畑が葡萄の代わりに棘をもたらすとき、神は葡萄畑に雨を降らさないように雲に命令すること以外に何ができるでしょうか（イザ 5:4-6）。したがって、私たちの罪ゆえに捕囚は私たちにも課せられており、そしてもし私たちが悔い改めないなら、私たちはネブカドネツァルやバビロニア人どもに引き渡されるおそれがあります。それは、霊的なバビロニア人どもが私たちを引き裂くためにです。これらのことが課されているために、預言者たちの言葉、律法の言葉、使徒たちの言葉、そして私たちの主にして救世主イエス・キリストの言葉は、私たちに悔い改めについて語り、私たちを回心へと呼び寄せています。もし私たちが聞き従うなら、私たちは、「私が彼らになすために語ったすべての悪について、私もまた悔い改めよう」（エレ18:8）と言う方を信じましょう。以上は〔エレミヤ書の〕前文についてです。

彼が葡萄畑に雨を送っても葡萄畑が葡萄の代わりに棘をもたらすとき、彼はそれに雨を降らさないように雲に命令すること以外に何ができるでしょうか（イザ 5:4-6）。したがって、今では私たちの過ちゆえに――それらを私たちは私たち自身で意識していますが――私たちもまた捕虜にされています。というのも、もし私たちが悔い改めを行わないなら、私たちは感覚的に私たちを苦しめるネブカドネツァルやバビロニア人どもに引き渡されるおそれがあります。これらのことが近づいているために、預言者たちの言葉、律法の言葉、使徒たちの言葉、そして私たちの主にして救世主イエス・キリストの言葉は、悔い改めへと励まし、救いへと呼び寄せています。もし私たちが聞き従うなら、私たちは、「私が彼らになすために語ったすべての悪について、私もまた悔い改めよう」（エレ18:8）と言うところの方を信じましょう。以上は〔エレミヤ書の〕前文についてです。

第 5 節

（ギリシア語）

しかし、前文のあとに「主の言葉が彼に生じた」（エレ 1:4）と書かれています。これは明らかにエレミヤのことです。では、主の言葉は彼に何と言っているのでしょうか。残りの預言者たちに言われたことを超えて、特別なことです。というのも、こんなことは預言者たちの誰にも言われていないことを私たちは知っているからです。アブラハムは、「彼は預言者であり、あなたのために祈るだろう」（創20:7）のところで預言者と呼ばれました。しかし神は彼に対して次のようには言いませんでした、「私があなたを胎の中で形作るより前に、私はあなたを知っている。そしてあなたが子宮から出てくるより前に、私はあなたを聖別した」（エレ 1:5）。しかし後にあるときにアブラハムは聖別されました、「自分の土地から、自分の親族から、自分の父の家から」（創12:1）出てきたときに。イサクは約束に従って生まれましたが、私たちは彼に対

（ラテン語訳）

しかし、前文のあとに「主の言葉が彼に生じた」（エレ 1:4）と書かれています。これは明らかにエレミヤに対してのことです。では、主の言葉は彼に何と言っているのでしょうか。残りの預言者たちに言われたところのすべてのことに関して、特別なことです。というのも、こんなことは預言者たちの誰かに決して言われていないことを私たちは知っているからです。アブラハムは、「彼は預言者であり、あなたのために祈るだろう」（創20:7）と言われているところにおいて預言者と呼ばれました。しかし神は彼に対して次のようには言いませんでした、「私があなたを胎の中で形作るより前に、私はあなたを知っている。そしてあなたが子宮から出てくるより前に、私はあなたを聖別した」（エレ 1:5）。しかし後に最終的にアブラハムは聖別されました、「自分の土地から、自分の親族から、自分の父の家から」（創12:1）出てきたときに。

してはこうした言葉が言われているのを見出しませんでした。そして後のことについて私が語るのに何が必要でしょうか。エレミヤは特別な贈り物を得たのでした。それは「私があなたを胎の中で形作るより前に、私はあなたを知っている。そしてあなたが子宮から出てくるより前に、私はあなたを聖別した」（エレ 1:5）という贈り物です。

イサクは約束に従って生まれましたが、私たちは彼に対してはこうした言葉が言われているのを見出しませんでした。そしてそれぞれのことについて私が語るのに何が必要でしょうか。エレミヤは全体の間で特別な贈り物を得たのでした。それは主が次のように言ったときです、「私があなたを胎の中で形作るより前に、私はあなたを知っている。そしてあなたが子宮から出てくるより前に、私はあなたを聖別した」（エレ 1:5）。

第 6 節

（ギリシア語）

ある者たちがこれらのこと〔エレ 1:5 の一節〕を、エレミヤ〔への相応しさ〕より大きいとして、私たちの救い主や主に帰していることを、私たちは知らないわけではありません。しかし、知るべきは、私がこれから引用する多くのものが彼〔エレミヤ〕に合致し、また〔同時に〕救い主に帰せられ得るということです。一方で〔また知るべきは〕、エレミヤについて語られていることのごくわずかなものが言葉〔解釈〕を圧迫し、多くの者たちにとって救い主に相応しいものとなり得なかったということです。では何が救い主に相応しいものなのでしょうか。「『私があなたを遣わしたら、すべての者たちのもとへ行きなさい。そして私があなたに命じたら、すべてのことに従って語りなさい。彼らの顔を恐れてはならない。なぜなら私はあなたと共にあってあなたを救い出すからである』と主は言った」（エレ 1:7-8）。これらはまだはっきりとは救い主に帰せられていないように見えます。しかし、次のもの〔はどうでしょうか、〕「そして主はご自分の手を私へと伸ばし、私の口に触れた。そして主は私に言った、『見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた。見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、破滅させるために』」（エレ 1:9-10）。〈これは、エレミヤに関する解釈を圧迫します。〉エレミヤはどんな諸民族を根絶するのでしょうか、どんな諸王

（ラテン語訳）

ある者たちがこれらのこと〔エレ 1:5 の一節〕を、エレミヤ〔への相応しさ〕より大きいかのように、私たちの救い主や主イエス・キリストに帰している者であることを、私たちは知らないわけではありません。しかし、知るべきは、私たちがこれから引用もするこれらのうちの多くのものは、救い主に相応しくなり得るものであるということです。一方で〔また知るべきは〕、エレミヤについて語られていることのごくわずかなものが理解を圧迫するということです。あたかも、多くの者たちが考えているように、それらは主について言及され得ないかのように。では何が主に相応しくなり得るものなのでしょうか。「『私があなたを遣わすところのすべての者たちのもとへ行きなさい。そして私があなたに命じるところのすべてのことを語りなさい。彼らの顔を恐れてはならない。なぜなら私はあなたと共にあってあなたを救い出すからである』と主は言った」（エレ 1:7-8）。これらはまだはっきりとは救い主に帰せられていないように見えます。しかし後に続くもの、すなわち「そして主はご自分の手を私へと伸ばし、私の口に触れた。そして主は私に言った、『見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた。見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、破滅させるために』」（エレ 1:9-10）は、エレミヤに関して解釈を難しくしています。エレミヤ

国を破滅させるのでしょうか。というのも、次のように書かれています、「見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、破滅させるために」。ではエレミヤは、「そして滅ぼす」のところでまさにエレミヤに関連しているかのように言われている「滅ぼす」ことのために、どんな力を持っているのでしょうか。エレミヤはどういったものを建てたのでしょうか、「そして建てる」（エレ 1:10）と言われるために。エレミヤは言います、「私は助けなかった。誰も私を助けなかった」（エレ 15:10）と。では、いかにして彼に「建てる、そして植える」（エレ 1:10）ことが与えられたのでしょうか。いかにしてエレミヤに「植える」ことが相応しくなるのでしょうか。これらが救い主に帰せられることは、解釈する者を圧迫しません。なぜなら、それらにおいてエレミヤは、救い主の象徴だからです。しかし、これからまさに示されるものは、非常に知的な者たちがいかにこれらもまた救い主に相応しくなり得るかを示そうとしても、その者たちをも圧迫します。「そして私は言った、『主人たる主よ、見よ、私は語ることができない』」（エレ 1:6）。救い主とは知恵であり、神の力ですが（Ⅰコリ 1:24）、この御方は、自らのうちに肉的に宿った神性の充備を私たちにもたらしました（コロ 2:9）。――〔では〕どうすれば「私は語ることができない」ことが救い主につながり得るのでしょうか。しかし、救い主が自分のことをうまく述べられないのであれば、「私は若い」（エレ 1:6）もまた救い主に関しては退けられます。というのも、もし主が彼に前述のこと〔「私は若い」〕を「言ってはならない」（エレ 1:7）と言うならば、救い主がそのことをうまく述べられないこととして退けるのは明らかだからです。したがって、これらは救い主には相応しくありません。〈しかし、〉先のもの〔エレ 1:9-10〕が救い主についてだということに難色を示す必要があるようには見え〈ません〉。一方で、これら〔エレ 1:6-7〕はエレミヤに帰せられるが、先のもの〔エレ 1:9-10〕はどんな諸民族を根絶するのでしょうか、どんな諸王国を破滅させるのでしょうか。正当にも彼について次のように言われています、「見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、破滅させるために」。ではエレミヤは、「そして滅ぼす」と言われているように、「滅ぼす」ことのために、どんな力を持っているのでしょうか。彼はどういったものを建てたのでしょうか、「そして建てる」（エレ 1:10）とあとで付け加えられるために。エレミヤは言います、「私は助けなかった。誰も私を助けなかった」（エレ 15:10）と。では、いかにして彼に建てることと植えること（エレ 1:10）が与えられたのでしょうか。私たちが述べたように、これらが救い主に帰せられることは、解釈する者を圧迫しません。なぜなら、それらにおいてエレミヤは、救い主の象徴だからです。しかし、これらに続くものもまた、非常に知的な者たちにさえ、いかにそれらが主に相応しくなり得るか説明の困難さをもたらします。「そして私は言った、『主人たる主よ、見よ、私は語ることができない』」（エレ 1:6）。救い主とは知恵であり、神の力ですが（Ⅰコリ 1:24）、彼のうちには神性の充満が肉体的に宿っています（コロ 2:9）。――〔では〕どうすれば「私は語ることができない」ことが彼に相応しく成り得るのでしょうか。しかし、いわば彼がうまく応答できないのであれば、「私は若い」（エレ 1:6）もまた彼に関しては退けられます。というのも、もし主が彼に「『私は若い』と言ってはならない」（エレ 1:7）と言うならば、いわばうまく語ることのできない者が非難されることは明らかだからです。したがって、これらは救い主には相応しくないように思われます。しかし、先のもの〔エレ 1:9-10〕は彼に帰せられると容易に理解されます。一方で、あるものはエレミヤについて、またあるものは救い主についてと理解されるべきと言うことも難しくありません。それでも、聖書をよく知ろうと努める者はそうした箇所で、一つのテクストのもとで言葉の理解が切り分けられるのを見

救い主に帰せられると言うことも難しくありません。それでも、良識ある者はそうした箇所で、一連の言葉の中で、エレミヤに対してにせよ救い主に対してにせよ、語られた言葉を切り分けるのを見るとき、非常に圧迫されることでしょう。またそれらが〈キリスト〔への相応しさ〕よりも小さいので、〉キリストではなくエレミヤに相応しいと言ったり、それらがエレミヤ〔への相応しさ〕よりも大きいので、エレミヤではなくキリストに相応しいと言ったりすることは、思慮に欠けています。そこで、全体がエレミヤに帰せられるべきであり、またエレミヤ〔への相応しさ〕よりも大きいと思われることが説明されるべきなのです。

第 7 節

（ギリシア語）

神から言葉を得て、また天の言葉の恵みを持つすべての者は、それらを「諸民族と諸王国を根絶し、滅ぼすために」（エレ 1:10）取りました。しかし、仮に神から言葉を得たすべての者が諸民族と諸王国を根絶すると言われているのだとしても、その諸民族と諸王国は肉体的な意味ではないと私には思われます。むしろ、罪によって支配される人間の魂を、使徒のもとで言われていること、すなわち「したがって、罪が私たちの死すべき体において支配することがあってはならない」（ロマ 6:12）に従って考えるとき、また罪の多くの種類をも見るとき、彼は諸民族のことも諸王国のことも、人間の魂における悪として寓意的に解釈します。すなわち、エレミヤにであれ他の誰かにであれ与えられた神の言葉によって根絶され、滅ぼされるものとして。こうして救い主についてとしては〔解釈を〕圧迫する第一のもの〔エレ 1:7-8〕もエレミヤに相応しいものとなり得るし、第二のもの〔エレ 1:9-10〕も寓意的に解釈すると予型としてエレミヤに相応しいものとなり得るのです。

聞いている方々の誰かが私に次のように言うでしょう。「他の言葉も説明してください。そしるとき、激しく悲しむことでしょう。またこれら〔エレ 1:6-7〕が〔救い主への相応しさ〕よりも小さいので、救い主ではなくエレミヤに相応しいと言われたり、あれら〔エレ 1:9-10〕が〔エレミヤへの相応しさ〕よりも大きいので、エレミヤではなくキリストに〔相応しい〕と言われたりしているのを見るとき〔、激しく悲しむことでしょう〕。このことから、私たちは全体をエレミヤに帰するようにするべきです。すなわち、〔エレミヤへの相応しさ〕より大きいために、彼の状態を超えるように思われることの全体を。

（ラテン語訳）

神から言葉を得た者は誰でも、天の雄弁の恵みを使いながら、それゆえに、それらを受け取りました、「諸王国と諸民族を根絶し、滅ぼす」（エレ 1:10）ために。しかし、神の言葉を得たところのすべての者の諸民族と諸王国が言及されるとき、私は彼が諸王国と諸民族を肉体的に理解することを望みません。むしろ、罪によって支配される人間の魂を、使徒において書かれているところのこと、すなわち「したがって、罪があなたたちの死すべき体において支配することがあってはならない」（ロマ 6:12）に従って考えるとき、また罪の多くの種類をも見るとき、彼は諸王国のことも諸民族のことも、人間の魂を支配したさまざまな罪を通じて寓意的に解釈します。それらはエレミヤにであれ他の聖者たちにであれ与えられた神の言葉によって根絶され、掘り崩されるであろうものでした。こうして救い主に相応しいようには見えない第一のもの〔エレ 1:7-8〕もエレミヤに帰せられ、第二のもの〔エレ 1:9-10〕は、言われたことが寓意的に言われていると知っている者によって、エレミヤに〔相応しいと〕見なされるのです。

聞いている方々の誰かが私に次のように言う

て書かれたものすべてを救い主に相応しいものとして示そうとしてください。第二のもの〔エレ 1:9-10〕について困難はありません。というのも、明らかに救い主は悪魔の諸王国を根絶し、諸民族を滅ぼしたからです、異邦人的な生活を破壊することで。それから、救い主についてまるで中傷しているようなものに関して、どのようにその言葉を、つまりどのように救い主が、『私は語ることができない、なぜなら私は若いから』（エレ 1:6）云々と言えるのかを説明してください」と。その言葉が狭められているのがあなたに見えるでしょうか。私たちは救い主が主だと知っています。私たちは言葉の価値と真実に従って、これらを救い主に適用しようとします。聖書を証言として取ることが必要です。というのも、私たちの考えは証言の裏付けがなく、また解釈は信頼できないからです。〈そして〉「二人か三人の証人たちの口で、すべての言葉は確定されるべきである」（Ⅱコリ13:1、マタ18:16、申19:15も参照）は、人間よりも語りに相応しいのです。その結果、私は新約および旧約聖書から二つの証言を取り、また福音、預言者、使徒から三つの証言を取ることで、解釈の言葉を定めましょう。というのも、このようにして「すべての言葉は確定されるべき」だからです。では、どのようにして私たちはこれらを救い主に適用することができるのでしょうか。旧約聖書を証言として取ってみてください。「子供は善か悪かを知る前に、善を選ぶために、悪徳には従わない」（イザ 7:16）。そしてこれらはイザヤにおいては明らかに救い主について述べられています。「見よ、乙女が胎に息子を持ち、産むだろう。そして彼らは彼の名をエンマヌエルと呼ぶだろう」（イザ 7:14）。そしてこれに「子供が知る前に」がもたらされます。またもし福音からも例を取る必要があるなら、イエスは大人になっておらず、まだ子供でしたが、「自分自身を空にした」（フィリ 2:7）ので、成長していました。というのも、成熟してから成長する者は誰もいませんが、成長を必要としたら成長するからでしょう。「他の言葉も明らかにしてください。そして救い主について書かれたところのものすべてを、あたかも彼について書かれたものであるかのように示してください。第二のもの〔エレ 1:9-10〕について不安になることはありません。というのも、明らかに救い主は悪魔の諸王国を根絶し、諸国民を滅ぼしたからです、異邦人的な生活を破壊することで。理解を困難にするところの諸々において、すなわち、どのように救い主が、『私は語ることができない、なぜなら私は若いから』（エレ 1:6）云々と言えるのでしょうか」と。その言葉において解釈者たちは狭められています。私たちはイエス・キリストが神だと知っています。私たちは人の価値に従って、語られている言葉を説明しようと努めます。それゆえに、聖書を証言へと呼ぶことが私たちにとって必要です。というのも、私たちの考えや解釈はそれらの証言なしで同じ意味を持たないからです。そして「二人か三人の証人たちの口で、すべての言葉は定まるべきである」（Ⅱコリ 13:1、マタ 18:16、申 19:15も参照）と言われているところは、どんな人数であるかよりも、解釈する者の証明に、より相応しいのです。その結果、私は新約および旧約聖書から二つの証言を取り、また福音、預言者、使徒から三つの証言を取ることで、私の理解の言葉を定めましょう。というのも、このようにして「すべての言葉は定まるべき」だからです。では、どのようにして私たちはこれらを救い主に結び付けることができるのでしょうか。旧約聖書を証言として私に与えてください。「子供が善あるいは悪を見分ける前に」云々（イザ 7:16）。イザヤも〔証言として〕与えてください。「見よ、乙女が胎に息子を持ち、産むだろう。そして彼の名はエンマヌエルと呼ばれるだろう」（イザ 7:14）。そしてこれに「子供が知る前に」が付け加えられます。またもし福音からも証言を取る必要があるなら、イエスは、大人ではなくまだ子供として、「奴隷の状態を受け入れつつ、自分自身を空にした」（フィリ 2:7）ので、成長していました。と

す。したがって、彼は年齢によって成長し、知恵によって成長し、神と人のもとにある恵みによって成長しました（ルカ 2:52）。というのも、もし彼がここに下って来たときに自分自身を空にしたのなら、また自分自身を空にした後で、自分自身をそこから空にしたところのものを再び取っていたのなら ── なぜなら彼は進んで自分自身を空にしたのですから ──、彼が「知恵、年齢、そして神と人間のもとにある恵みによって」成長しさえしたことがなぜ相応しくないのでしょうか〔、いや相応しいのです〕。そして彼について、「彼が善か悪かを知る前に、彼は善を選び悪徳に従わなかった」という、私がイザヤから引用したことが本当になること〔がなぜ相応しくないのでしょうか、いや相応しいのです〕。

第 8 節

（ギリシア語）

しかし誰かがこう言うでしょう、「たとえあなたが『彼は知らない』を救い主に適用することができても、またたとえあなたがそうしたことを救い主について述べることができ、彼を子供と取ることができたとしても、『独り子』（ヨハ 1:14）について、『すべてのものの創造の前に生まれた方』（コロ 1:15）について、そして『聖霊があなたにやってきて、いと高き方の力があなたを覆う』（ルカ 1:35）とあるように、懐胎より先に良き知らせを受けていた者について、これらのことを言うことは、あなたにとって躓きとならないのですか。それでもあなたは、『私は語ることができない』と言うのですか」、と。救い主に関して何か特筆すべきことや何か偉大なことをその箇所に見出すことができるかどうか見てみてください。なぜなら、彼が何かを「知らない」ときに、彼はそれらを知っているよりも知らない方が良いからです。私は、何かを知らないと証言する彼の声を使いさえすることにします。彼は少なくとも彼に言い立てる者たちに次のように言います、「私たちはあなたの名に

（ラテン語訳）

しかし誰かが私にこう言うでしょう、「たとえ『彼は知らない』やそうした他のより大きなものが救い主について言われていると理解され得るとしても、またたとえあなたが彼を子供と取ることができたとしても、『独り子』（ヨハ 1:14）について、『すべてのものの創造の前に生まれた方』（コロ 1:15）について、そして『聖霊があなたにやってきて、いと高き方の力があなたを覆う』（ルカ 1:35）とガブリエルが言うことで、懐胎するより先に良き知らせを受けていた者についてのこうした理解に、あなたは躓かないのですか。それでもあなたは、彼が語ることができないとあえて言うのですか」、と。そのため、私が救い主について何か相応しいことをこの箇所で提出することができるかどうか私は見てみるつもりです。なぜなら、彼が何かを「知らない」ときに、彼がそれらを知っているかどうかよりも知らないかどうかの方が良いからです。私は、彼が知らない何かはどんなふうであるか、彼の声を使うことにします。彼は自分に言い立てる者たちに次のように答えます、「私たちはあ

おいて食べ、あなたの名において飲み（ルカ13:26）、あなたの名において悪魔を追い出し、多くの力をなしたのではなかったか。私から離れよ、私はあなたたちのことなど決して知らない」（マタ 7:22以下）。では、「私はあなたたちのことなど決して知らない」という、そこで救い主によって言われている一節は、彼の力をより小さなものに変えてしまったのでしょうか。それともより大きく驚くべきものに〔変えたのでしょうか〕。なぜなら彼は劣るものや失われたものを知らないのであって、際立ったものやより優れたものは知っており、そして「主は彼自身のものを知っている」（Ⅱテモ 2:19、民16:5も参照）のですから。そして「もしある人がそれを認めないなら、その人は認められない」（Ⅰコリ14:38）。そこで、罪人が神によって認められることはないのです。

聞いている方々の誰かが私に次のように言うでしょう、「彼が罪人たちを知らないのだとあなたは示しました。彼が不法を働く者たちを知らないのだとあなたは示しました（マタ 7:23）。というのも、彼らは彼の知識に値しないからです。では、いったいどのようにして、救い主によって『私は語ることができない』（エレ 1:6）と言われたことが偉大で輝かしいのだとあなたは証明するのですか」、と。語ることは人間的です。語ることは言語を使うことです。そのため、例えば、ヘブライ人たちの言葉あるいはギリシア人たちの言葉〈あるいは他の〉誰かの言葉を口にすることになります。もしあなたが救い主について思いを馳せ、彼を「初めに神と共にあった」（ヨハ 1:2）言葉と知るなら、彼が語ることができないのは語ることが人間的であるためであり、それどころか、〈彼がそうできないのは〉彼の知っていることが語ることより偉大だからだと分かるでしょう。一方で、もしあなたが天使たちの言語を人間たちの言語と比べるなら（Ⅰコリ13:1）、また彼が天使たちよりもまた偉大であるとあなたが知るなら ── 使徒がヘブライ人たち宛の手紙の中で証言したように（ヘブ1:

なたの名において食べ、あなたの名において飲み（ルカ13:26）、あなたの名において悪魔を追い出し、多くの力をなしたのではなかったか。私から離れよ、私はあなたたちのことなど決して知らない」（マタ 7:22以下）。では、次のようには考えないのですか。「私はあなたたちのことなど決して知らない」と彼が言ったこのことは、彼の力をより小さなものだと証明するのでしょうか、それともより大きく驚くべきものだと〔証明するのでしょうか〕。なぜなら彼は悪いものや失われるであろうものなど知らないのですから。というのも、彼はこれらから際立ったものを知っており、より優れたものを知っており、そして「主は彼自身のものを知っている」（Ⅱテモ 2:19、民16:5も参照）のですから。そして「もしある人がそれを認めないなら、その人は認められない」（Ⅰコリ14:38）。そこで、明らかであるように、罪人が神によって認められることはないのです。

聞いている方々の誰かが私に次のように言うでしょう、「神が罪人たちを知らないのだとあなたは示しました。彼が不法を働くところの者たちを知らないのだとあなたは示しました（マタ 7:23）。というのも、彼らは彼の知識に値しないからです。いったいどのようにして、彼によって『私は語ることができない』（エレ 1:6）と言われたこと ── それは人間的です ── が偉大で輝かしいのだとあなたは証明するのですか。また〔いったいどのようにして〕私たちは雄弁さを使うのでしょうか、例えば、ヘブライ人たちの言葉、あるいはギリシア人たちの言葉、あるいは残りの者たちの言葉を」、と。それゆえに、もしあなたが救い主へと思いを馳せ、彼を『初めに神と共にあった』（ヨハ 1:2）言葉と知るなら、彼が語ることができないのは言われていることを語ることは人間的であるためであり、もし彼がその理由で〔語ることが〕できないのであれば、それは彼の知っていることが〔語ること〕より偉大だからだと理解してください。一方で、もしあなたが天使たちの言語を人間たち

4 以下）――、あなたは彼が天使たちの言語よりも偉大だと言うことでしょう、彼が父と共にある言葉としての神（ヨハ 1:1 以下）だったときに。したがって彼は、より偉大なことではなく、よりつまらなくより小さなことの知識を学んだり、あたかも獲得したりするのです。そしてちょうど私が、子供たちと会話するときに、自らに強いて舌足らずに話すことを学ぶように――というのも、私は言ってみれば子供のように話すことはできないので、成長した者でありながら、強いて子供たちと会話しているのです――、それと同じやり方で、救い主もまた「父の中に」（ヨハ14:10以下）いるときに、そして神の栄光の荘厳さに与っているときには、人間の言葉を語ることはなく、下にいる者たちにはっきり発音することも知らなかったのです。しかし彼が人間の体へとやって来るときには、先の言葉に従って、「私は語ることができない、なぜなら私は若いから」（エレ 1:6）と述べているのです。〔彼が〕若者であるのは、肉体的な生まれゆえであり、老人であるのは、「あらゆる創造物の初穂」（コロ 1:15）に従ってです。若者であるのは、「諸々の時代の完成時に」（ヘブ 9:26）彼がやって来たからです。〈そして〉彼は生に関してより後に現れました。したがって、彼は「私は語ることができない」と言うのです。「私は語ることよりも偉大な何かを知っているし、この人間の声よりも偉大な何かを知っています。あなたは私が人間たちに語ることを望むのですか。私は人間の言語をまだ受け入れたことはありません。私はあなたの、神の雄弁を持っています。私はあなたの、神の言葉なのです。あなたとなら私は会話することができますが、人間たちとは『私は語ることができない、なぜなら私は若いから』（エレ 1:6）」。

の言語と比べるなら（Ⅰコリ 13:1）、また彼が天使たちよりも偉大であるとあなたが知るなら――彼については使徒がヘブライ人宛の手紙の中で証言したように（ヘブ 1:4 以下）――、あなたは彼が天使たちの言語よりもまた偉大だと理解することでしょう、彼がこれほどまでに父と共にある言葉としての神（ヨハ 1:1 以下）だったときに。したがって彼は、より偉大なことではなく、よりつまらなくより小さなことの知識を学んだり、いわば獲得したりするのです。ちょうど私もまた、子供たちと会話するときに、自分自身に無理を強いて舌足らずに話すことを学ぶように――というのも、私はいわば子供のように話すことはできないし、また途切れ途切れの言葉で、今や老人でありながら子供たちと会話をすることはできないからです――、それと同じやり方で、救い主は確かに神の栄光の荘厳さの中にいるときには、また「父の中に」（ヨハ 14:10以下）いるときには、人間の言葉を語ることはなく、下にいる者たちに話しかけることも知らなかったのです。しかし彼が人間の体へとやって来るときには、先の言葉に従って、「私は語ることができない、なぜなら私は若いから」（エレ 1:6）と述べているのです。〔彼が〕若者であるのは、割り当てゆえであり、老人であるのは、「あらゆる創造物の初穂」（コロ 1:15）に従ってです。若者であるのは、「諸々の時代の完成時に」（ヘブ 9:26）、そして彼の生の最後に時がやって来たからです。したがって、彼は「私は語ることができない」と言うのです。「というのも、私は語ることよりも偉大な何かを知っているし、この死すべき者の声よりも偉大な何かを知っているからです。あなたは私が地上の者たちに語ることを望むのですか。私は人間の脆さをまったく受け入れませんでした。私はあなたの雄弁を持っています。私はあなたの言葉なのです。あなたとなら私は会話することができますが、人間たちとは『私は語ることができない、なぜなら私は若いから』（エレ 1:6）」。

第9節

（ギリシア語）

「〈『私は若い』と言ってはならない、〉なぜなら、私があなたを誰のもとへ遣わそうとも、あなたは行きなさい」（エレ 1:7）。このように、彼〔主〕は手を伸ばし、彼の口に触れ、彼に言葉を与えました。そして彼は王国を通して彼に言葉を与えました、彼が根絶するために（エレ 1:9）。しかし、彼は根絶することの言葉を必要としませんでした、「父の中に」（ヨハ 14:10 以下）いたときは。彼は破滅させる言葉を必要とせず、劣った者たちを引きずり下ろす〔言葉を必要としませんでした〕。というのも、そこでは破滅の価値はなく、根絶の価値もなかったからです。したがって、重要なのはこういうことです。すなわち、「私はあなたたちを知らない、なぜならあなたたちは不法を働く者たちだからである」（ルカ13:27、マタ 7:23）とあるように、そのように彼の栄光の絶大なる偉大さゆえに（エフェ 1:19、Ⅱコリ 3:10）、救い主によって言われていますので、「私は語ることができない」（エレ 1:6）という一節は、「私は人間的なことなど語れない」ということに等しくなり得るのです。

（ラテン語訳）

「『私は若い』と言ってはならない、なぜなら、私があなたを誰のもとへ遣わそうとも、あなたは行きなさい」（エレ 1:7）。それから、彼〔主〕は彼の口に触れるために手を激しく動かし、その結果、彼に言葉を与え、それによって支配を根絶しました。しかし、救い主は、それらを理解するために言葉を必要としませんでした、「父の中に」（ヨハ14:10以下）いたときは。天には、破滅させられるに値する者たちは誰もいなかったからです。しかし、今や彼は小さなものを受け取っているのであって、優れた、より大きなものは僅かに〔しか受け取っていません〕。さらに、彼が他の個所で輝かしくも「私はあなたたちを知らない、なぜならあなたたちは不法を働く者たちだからである」（ルカ13:27、マタ 7:23）と述べたように、この引用から次のことが認められます。すなわち、今では彼は、神でありながら、輝かしくも言葉を理解したということ、またその栄光の荘厳さの中に従って、「私は語ることができない」と言ったということです。これは「私は人間的なことなど知らない」という意味です。

第10節

（ギリシア語）

しかし、エレミヤに対してにせよ、救い主に対してにせよ、「私があなたを胎の中に形作る前に、私はあなたを知っていた」（エレ 1:5）と言われています。創世記を読み、世界の創造について言われていることに注目すると、あなたは、その書物が極めて弁証法的であり、「私があなたを胎の中に『作る』前に、私はあなたを知っていた」とは言っていないと分かるでしょう。というのも、彼が「像に基づいて」（創 1:26, 27）創造されたとき、「神は、『私たちの像と似姿に基づいて人間を作ろう』と言った」（創 1:26）のであって、「形作ろう」とは言いませんでした。しかし、彼が「地から塵を」取ったとき、

（ラテン語訳）

しかし、エレミヤに対してにせよ、救い主に対してにせよ、「私があなたを胎の中に形作る前に、私はあなたを知っていた」（エレ 1:5）と言われています。創世記を読み、そこで世界の創造について書かれているところのことに注目すると、あなたは、聖書が言葉に関して極めて慎重であり、「私があなたを胎の中に『作る』前に、私はあなたを知っていた」とは言っていないと分かるでしょう。というのも、「像に基づいて」（創 1:26, 27）創造が生じたとき、「神は、『私たちの像と似姿に基づいて人間を作ろう』と言った」（創 1:26）のであって、「形作ろう」とは言いませんでした。しかし、彼が「地から塵

彼は人を「作った」のではなく、「人を形作った」（創 2:7）のであり、「彼が形作った人を楽園に置き、人が耕し、守るようにした」（創 2:8, 15）のです。もしあなたができるなら、作ること〈と形作ること〉の違いを見てください。というのも、主はエレミヤに語っているにせよ、救い主に語っているにせよ、「私があなたを胎の中に『作る』前に、私はあなたを知っていた」とは言っていません。なぜなら、作られるものが胎の中に生じるのではなく、地の塵から形作られるもの、これこそが胎の中に創造されるからです。

「私があなたを胎の中に形作る前に、私はあなたを知っていた」（エレ 1:5）。もし主がすべての者たちを知っていたなら ── 〈というのも、こうしたこと〉に対し、「私は語ることができない」〈と言わなければなりません〉、なぜなら主はすべての者たち知っていたと言わなければならないからです ──、彼は特にエレミヤに「私はあなたのことを知っていた」とは言わなかったはずです。確かに、神は優れた者たちを知っており、神は自分の知識に値する者たちを知っており、そして「主は自分のものである者たちを知っている」（Ⅱテモ 2:19、民16:5 も参照）のです。しかし、神は〔知るに〕値しない者たちを知りません。ちょうど救い主も、「私はあなたたちのことを決して知らない」（マタ 7:23）と言っているとおりです。私たちは人間ですから、私たちが進歩すればするほど、ある者たちを、知るに値すると判断します。また私たちはある者たちのことを聞きたいとは思わないので、彼らを知ることも見ることもありませんが、別の者たちのことは知りたいと思います。では、万物の神はどうでしょうか。彼はファラオのことを知りたいと思い、エジプト人たちのことを知りたいと思いますが、それらは神の知識には値しません。しかし、モーセは値しますし、預言者たちのそれぞれはこれほどまでに偉大です。神があなたのことを知り始めるためには、あなたは多くのことを正しくなさなければなりませを」取ったとき、彼は人を「作った」と書かれているのではなく、「人を形作った」（創 2:7）〔と書かれている〕のであり、「彼が形作った人を楽園に置き、人が耕し、守るようにした」（創 2:8, 15）のです。もしあなたができるなら、作ることと形作ることの違いを見てください。というのも、彼はエレミヤに語っているにせよ、救い主に語っているにせよ、「私があなたを胎の中に『作る』前に」とは言っていません。なぜなら、作られるところのものが胎の中に生じるのではなく、地の塵から形作られるところのもの、これこそが胎の中に創造されるからです。

「私があなたを胎の中に形作る前に、私はあなたを知っていた」（エレ 1:5）。もし主がすべての者たちを知っていたなら、なぜ彼は残りの者たちから特にエレミヤに「私はあなたを知っていた」と言うのでしょうか。もしや、神がこれほどまでに彼らを知っているのは、彼らが自分の知識に値する者たちだからであり、また彼らが自分のものである者たち（Ⅱテモ 2:19、民16:5 も参照）だからなのでしょうか。しかし〔知るに〕値しない者たちのことは父も子も知らず、「私はあなたたちのことを決して知らない」（マタ 7:23）と言っていたのでしょうか。私たちは人間ですから、もし私たちが何らかの方法で価値を授けられたら、私たちは、ある者たちを私たちの知識に値する者たちと、またある者たちを〔知識に〕値しない者たちと判断します。そして私たちが知りたくはない者たちのことを、私たちは聞きたいとは思いませんし、私たちは彼らのことを知りません。では、あなたは全世界の神について何を見るでしょうか。彼はファラオのことを知りたいと思い、エジプト人たちのことを知りたいと思いますが、それらは彼の知識には値しません。しかし彼らは自分自身でそうしたのであり、その結果として無視されたのです。しかし、彼はモーセを知っていますし、預言者たちを知っています、たとえ誰かが彼らに似ているのだとしても。あなたが主によって知られ始めるためには、あなたは多くのことに

ん。というのも、彼はエレミヤのことは胎の中で形作る前に知っていましたが、他の者のことは30年経ってから、〈他の者のことは〉40年経ってから知り始めるからです。

言葉は謎めいています。それらは救い主について探求されるのではなく、エレミヤについて、耳を持つ者たち（マタ11:15）による理解を必要としています。

骨折らなければなりません。というのも、彼はエレミヤのことは胎の中で形作る前に知っていましたが、預言者たちのうち他の者のことは30年経ってから知り始め、他の者のことは40年経ってから〔知り始めるからです〕。

救い主についての言葉は口で言いようがありませんし、あまり探求されませんでした。しかし、エレミヤについて私たちは、聖書の知識を持った者たちの耳を必要としています。

第11節

（ギリシア語）

いかにして彼は次のように言うのでしょうか、「私はあなたを胎の中に形作る前に、私はあなたを知っていた。そしてあなたが胎から生まれる前に、私はあなたを聖別した」（エレ 1:5）と。神はご自身のために、ある者たちを聖別します。彼〔神〕はこの者が誕生した後にこの者を聖別するために待つのではなく、胎から生まれる前に、彼はすでにこの者を聖別したのでした。もしあなたが〔この者を〕救い主に帰するなら、胎から生まれる前に彼が聖別されたと言うことは難しくありません。もし〔この者を〕救い主に帰するなら、彼は生まれる前に聖別されただけでなく、さらに前にも聖別されたのです。しかし、このエレミヤは胎から生まれる前に聖別されたのでした。

（ラテン語訳）

いかにして彼は次のように言うのでしょうか、「私はあなたを胎の中に形作る前に、私はあなたを知っていた。そしてあなたが母親の胎から生まれる前に、私はあなたを聖別した」（エレ 1:5）と。神はご自身でご自身のために、ある者たちを聖別します。彼〔神〕はこの者が誕生した後にこの者を聖別するために待つのではなく、胎から生まれる前に、彼はすでにこの者を聖別したのでした。もし、私が言ったように、あなたが〔この者を〕救い主に帰するなら、生まれる前に彼が聖別されたと言うことは難しくありません。主についてもそのようにあなたは理解することができます。すなわち、彼は胎から生まれる前に聖別されましたが、それどころか、限りなく時間の前から常に聖なる者だったのです。しかし、この者は胎から生まれる前に聖別されたのでした。

第12節

（ギリシア語）

「私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」（エレ 1:5）。もしあなたがエレミヤについて、「私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」という一節をよく調べたら、続きの部分に関してよく見てください。すなわち、彼は「諸国民の上に」預言をするように命じられており、また次のような副題があります。すなわち、「エラム」（エレ25:14［49:34］）、「ダマ

（ラテン語訳）

「私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」（エレ 1:5）。もしあなたがいかにしてエレミヤが諸国民のための預言者として立てられたのかをよく調べたら、続きの部分に関してよく見てください。すなわち、彼がすべての諸国民のために預言するように命じられるときのことです。というのも、次のような記述があります。すなわち、エラム（エレ25:14［49:34］）、

スコ」（エレ30:29［49:23］）、「モアブ」（エレ31:1［48:1］）など、すべての諸民族の上にエレミヤが預言した〔という副題が〕。そして「彼はすべての諸民族の上に預言した」ので、「私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」を、私たちは、かの人についてのことだと文字通りに取ります。しかし、もし神秘的な意味に向かった場合、もしエレミヤについてなら、私たちは先に論じましたが、もし救い主についてなら、何と言う必要があるでしょうか。彼は本当にすべての諸民族のために預言したのです。というのも、彼は、他の無数〔の役割〕であるように、預言者でもあるからです。彼は大祭司（ヘブ 2:17）であり、救い主であり、医者であるように、預言者でもあるのです。モーセは、たとえば、彼について預言していたとき、〔彼のことを〕預言者だと言っただけでなく、特に次のように言いました、「主なる神はあなたたちのために、〈あなたたちの〉兄弟たちから、私のような預言者を立たせるだろう。彼に耳を傾けなさい。そして、かの預言者に耳を傾けない者は誰でも、彼の民から滅ぼされるだろう」（申18:15, 19、使 3:22以下も参照）。それゆえに、彼は諸民族のために任命された預言者でもあり、また彼の唇に溢れるような、神からの恵みを得ました（詩44［45］:3）。それは、彼が肉体に宿っていたときのみならず、力と霊に宿っている今もまた、すべての諸民族のために彼が預言するためでした。その結果、すべての諸民族から彼の預言を果たし、人々を救いへと引き寄せたのです。

ダマスコ（エレ30:29［49:23］）、モアブ（エレ31:1［48:1］）など、すべての諸民族の上にエレミヤが預言した〔という記述が〕。そして「彼はすべての諸民族の上に預言した」ので、「私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」を、あなたは、述べられていることに従って取ることになります、もしあなたがそれでもこれらのことがエレミヤについて言われていると考えたいのなら。しかし、もしあなたが理解を神へと変えるなら、彼は本当にすべての諸民族のために預言したのです。というのも、彼は、他の無数〔の役割〕であるように、預言者でもあるからです。彼は祭司たちの長（ヘブ 2:17）であり、救い主であり、医者であるように、預言者でもあるのです。モーセは彼について報告していたとき、〔彼のことを〕預言者と呼んだだけでなく、すべての者たちの間で感嘆すべき預言者と呼び、次のように言いました、「彼はあなたたちのために、あなたたちの兄弟たちから、預言者を立たせるだろう。私たちの主なる神は言った。『私にするように彼に耳を傾けなさい。かの預言者に耳を傾けない者は誰でも、彼の民から滅ぶだろう』」（申18:15, 19、使 3:22以下も参照）。彼は諸民族のために任命された預言者でもあり、また彼の唇に溢れるような、神からの恵みを得ました（詩44［45］:3）。それは、彼がさしあたって肉体に宿っていたときのみならず、力と霊に宿っている今もまた、すべての諸民族のために彼が預言するためであり、彼自身の預言が世界全体から人々を救いへと引き寄せるためでした。

第13節

（ギリシア語）

「そして私は言った、『主人たる主よ、見よ、私は語ることができない。なぜなら私は若いから』。しかし主は私に向かって言った、『「私は若い」と言ってはならない。私があなたを誰のもとへ遣わそうとも、あなたは行きなさい』」（エレ 1:6 以下）。しばしば私たちが述べたことで

（ラテン語訳）

「そして私は言った、『主人たる主よ、見よ、私は語ることができない。なぜなら私は若いから』。しかし主は彼に向かって言った、『「私は若い」と言ってはならない。私があなたを誰のもとへ遣わそうとも、あなたは行きなさい』」（エレ 1:6 以下）。しばしば私たちが述べたことで

すが、ある者が肉体の年齢で老年にあっても、内的人間に従って子供であることができます。一方で、時に外的人間に従って子供であり、内的人間に従って大人であることもできます。そのような者がエレミヤでした。彼は肉体に限ってはまだ子供の年齢にありましたが、すでに神からの恵みを持っていたのです。それゆえに、彼に対して主は、「『私は若い』と言ってはならない」と言ったのです。それは彼がより若いことではなく、「成熟した大人」（エフェ 4:13）であることのしるしです。「私があなたを誰のもとへ遣わそうとも、あなたは行きなさい。そして私があなたにどんなことを命じようとも、すべて語りなさい。彼らの顔から恐れを感じてはならない」（エレ 1:7 以下）。神の言葉は、その言葉を使節として伝える者たちが、聞く者たちに対して危険を冒していることを知っています。というのも、非難されると、彼ら〔聞く者たち〕は彼ら〔伝える者たち〕のことを忌み嫌い、責められると、彼らは彼らのことを迫害するのです。預言者たちはどんなこともすべて苦しむのです。「預言者は、自分自身の故郷や自分の家のほかでは、敬意を持たれないことはない」（マタ 13:57）。このことについては前にも私たちは言及しました。神はその預言者を送るとき、どんなに大きな危険を彼が引き受けることになるか知っていました。そこで彼に、「『彼らの顔から恐れを感じてはならない。なぜならあなたを助けるために、私はあなたと共にいるからである』、と主は言った」（エレ 1:8）と言ったのです。エレミヤが苦しんだことが描かれています。彼は泥の穴へと投げ込まれると（エレ45［38］:6）、一日に一つのパンを食べ（エレ44［37］:21）、水だけを飲んでそこに留まりましたが、彼の預言は、彼が苦しんだ他の無数のことを示しました。「あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者が誰かいるだろうか」（使 7:52）と、ユダヤ人たちに向かって言われています。キリスト・イエスにおいてどんなことがあっても敬虔に生きることを欲する者たちが、敵対する諸権力によっすが、ある者が肉体の老年期にあっても、内的人間であることに従って、いつでも子供であることができます。そして逆に、しばしば、外的人間であることに従って子供が現れ、内的〔人間〕であることに従って成熟した大人が〔現れることもできます〕。そのような者がエレミヤでした。彼は肉体的にはまだ子供の年齢に、すでに自らに対して神から認められた恵みを持っていたのです。それゆえに、彼に対して主は、「『私は若い』と言ってはならない」と言ったのです。彼はこのことのしるしを、すなわち彼が若くはなく、「成熟した大人」（エフェ 4:13）であること〔のしるしを〕示して曰く、「私があなたを誰のもとへ遣わそうとも、あなたは行きなさい。そして私があなたにどんなことを命じようとも、すべて語りなさい。彼らの顔から恐れを感じてはならない」（エレ 1:7 以下）。というのも、神の言葉は、その言葉の使節の務めを果たす者たちが、聞くことを侮る者たちによって危険に陥っていると知っています。というのも、非難されると、彼らは非難を忌み嫌い、反駁されると、彼らは反駁する者たちを迫害するのです。何であれ悪いものすべてについて、いつでも預言者たちは苦しむのです。「預言者は、自分自身の故郷や自分の家のほかでは、敬意を持たれないことはない」（マタ 13:57）。このことについては前にも私たちは言及しました。それゆえに、私たちが述べ始めたように、神はその預言者を送るとき、どんなに大きな危険を彼が引き受けることになるか知っていました。それゆえに、神は預言者に勧告して、「『彼らの顔から恐れを感じてはならない。なぜならあなたを助けるために、私はあなたと共にいるからである』、と主は言った」（エレ 1:8）と言ったのです。エレミヤが苦しんだことは何でも描かれています。彼は泥の穴へと投げ込まれると（エレ45［38］:6）、一日に一つのパンを食べ（エレ44［37］:21）、水だけを飲んでそこに留まりましたが、彼が苦しんだ他の多くのことは、彼の書物の中に含まれています。「あなたがたの先祖たちが迫害しな

て、彼らが見つけることのできる道具を通じて、迫害されることが必要なのです（Ⅱテモ 3:12)。このことゆえに、疑問を持つことなしに、迫害される者たちがすべてのことをできるようにしましょう。彼らが不当さゆえに、罪ゆえに、貪欲さゆえに、不当に、正当にでなく迫害されることのないようにと祈りながら〔すべてのことができるようにしましょう〕。誰かが今までに正義のために迫害されたなら、その者が次の一節を聞けるようにしましょう。「幸いなのはあなたがたである、彼らがあなたがたを罵り、迫害し、あなたがたに逆らって私のゆえに偽ってあらゆる悪口を言うときに。喜びなさい、そして大喜びしなさい。なぜなら、天においてあなたがたの報いは大きいから。というのも、このようにして彼らは、あなたがたより前の預言者たちを迫害したからである」（マタ 5:11以下)。

かった預言者が誰かいるだろうか」（使 7:52）と、ユダヤ人たちに向かって言われています。キリストにおいて敬虔に生きることを欲する者たちが、あらゆる種類の敵対する諸権力によって、発見されたところのその道具を通じて、迫害されることが必要なのです（Ⅱテモ 3:12)。このことゆえに、苦難に見舞われた者にとっては、目新しいものや異質なものは何もありません。彼らがすべての命じられたことをできるようにしましょう。迫害の原因はキリストであるようにと、ただ彼らが祈ることができるようにしましょう。不当さゆえに、過失ゆえに、貪欲さゆえに、彼らが迫害されることのないように〔と、彼らがただ祈ることができるようにしましょう〕。誰かが今までに正義のために迫害されたなら、その者が次の一節を聞けるようにしましょう。「幸いなのはあなたがたである、彼らがあなたがたを罵り、迫害し、あなたがたに逆らって私のゆえにあらゆる悪口を言うときに。喜びなさい、そして大喜びしなさい。なぜなら、天においてあなたがたの報いは大きいから。というのも、このようにしてあなたがたより前の預言者たちは迫害されたからである」（マタ 5:11以下)。

第14節

（ギリシア語）

「『なぜならあなたを助けるために、私はあなたと共にいるからである』、と主は言った。そして主はご自分の手を私へと伸ばし、私の口に触れた。そして主は私に言った」（エレ 1:8 以下)。エレミヤとイザヤの違いを見てください。イザヤ曰く、「私は汚れた唇を持ちながら、汚れた唇を持つ民の間に住む。そして私は王を、サバオートの主を、私の目で見た」（イザ 6:5)。そして彼は汚れた仕事ではなく、ただ言葉だけを持っていると告白したので――というのも、このときまで彼は罪人だったので――、主はご自分の手を伸ばしませんでしたが、セラフィムの一体が自分の手で彼の唇に触れ、言いました、「見

（ラテン語訳）

「『なぜならあなたを助けるために、私はあなたと共にいるからである』、と主は言った。そして主はご自分の手を私へと伸ばし、私の口に触れた。そして主は私に言った」（エレ 1:8 以下)。エレミヤとイザヤの違いを見てください。イザヤ曰く、「私は汚れた唇を持ちながら、汚れた唇を持つ民の間に住む。そして私は王を、サバオートの主を、私の目で見た」（イザ 6:5)。そして彼は汚れた行為ではなく、ただ言葉だけを持っていると告白したので――というのも、このときまで彼は罪を犯していたので――、主はご自分の手を伸ばさず、セラフィムの一体も自分の手で彼の唇に触れませんでしたが、ただやっと

よ、私はあなたの不正を取り除いた」（イザ 6:6 以下）。しかし、この者〔エレミヤ〕は「胎から」（エレ 1:5）聖別されていたので、舌が彼に送られることもなく、祭壇から炭が送られることもなく（イザ 6:6）――彼は火に相当するものを何も持ちませんでした――、主の手そのものが彼に触れました。それゆえに、彼は次のように言います、「そして主はご自分の手を私へと伸ばし、私の口に触れた。そして主は私に言った、『見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた。見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶するために』」（エレ 1:9 以下）。

誰がそれほどに幸いなのでしょうか、悪魔が示したたくさんの王国を（マタ 4:8）、敵対する諸権力の王国を、罪に従った王国を、神によって与えられた諸々の言葉で根絶するほどに。というのも、次のように書かれています、「見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた。見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた〈、根絶するために〉」（エレ 1:9 以下）。諸王国があるように、諸民族もまたあります。〈自らのもとに民族を持たない限り、王国と呼ばれることはできません。〉いわば姦淫の諸王国があり、それぞれの姦淫が姦淫の諸民族となります。貪欲や略奪といった、同じ種類の罪は一つの王国となりますが、多くの種類の罪を持つ者たちの中には多くの王国もあるのです。それから、さまざまな罪のそれぞれに関して、王国の支配下にある諸民族が私に思い浮かびます。たとえば、ある人は姦淫の支配下にある王国の多くの諸民族を持ち、またある人は略奪の、誹謗の、怒りの支配下にある王国の多くの諸民族を持つと言うように。「根絶し、滅ぼすために、諸民族と諸王国の上に」（エレ 1:10）送られた神の言葉が必要なのです。何を根絶するのでしょうか。救い主は教えて曰く、「天の私の父が植えなかったすべての植物は、根絶されるだろう」（マタ 15:13）。魂の中には、天の父が植えなかった何かが内部にあります。というのも、「悪い考え、こで触って言いました、「見よ、私はあなたの不正を取り除いた」（イザ 6:6 以下）。しかし、彼〔エレミヤ〕は「胎から」（エレ 1:5）聖別されていたので、エレミヤにやっとこが送られることもなく、祭壇から炭が送られることもなく（イザ 6:6）――なぜなら、彼は火に相当するものを何も持ちませんでした――、主の手そのものが彼に触れました。それゆえに、彼は次のように言います、「そして主はご自分の手を私へと伸ばし、私の口に触れた。そして主は私に言った、『見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた。見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶するために』」（エレ 1:9 以下）。

誰がそれほどに幸いなのでしょうか、悪魔がキリストに示したたくさんの王国を（マタ 4:8）、悪霊たちの王国を、罪の王国を、彼が神によって与えられたこれらの言葉で根絶するほどに。というのも、次のように書かれています、「見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた。見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶するために」（エレ 1:9 以下）。諸王国が非常に多くあるように、諸民族もまたより多くあります。自らのもとに民族を持たない限り、何かの王国と呼ばれることはできません。たとえば、次のように言いましょう。罪人としての人間の中で、姦淫が支配しています。必要なのは、姦淫の王国が自らの諸民族を持つことです。ほとんど誰もそれから免れていない、貪欲や欺瞞といった一般の罪そのものは、それ自体の王国を持っていますが、一つの王国のもとでは、それは非常に多くの貪欲の種類を通じて、多くの諸民族を持っています。そしてそのことから、神の言葉が必要なのです、自分の諸民族と共にそのような諸王国が消し去られるために。福音書の中で救い主は示して曰く、「天の私の父が植えなかったすべての植物は、根絶されるだろう」（マタ 15:13）。私たちの魂の中には、天の父が植えなかった内的な何かが植え付けられています。というのも、「悪い考え、殺人、姦通、姦淫、窃盗、偽証、冒瀆」（マタ 15:19）はすべて、

殺人、姦通、〈姦淫、〉窃盗、偽証、冒瀆」（マタ15:19）はすべて、天の父によって植えられたわけではない植物です。もしあなたがこれらの考えが誰の植物であるのか見たいなら、次のことを聞きなさい、「敵の人間がこのことをしたのだ」（マタ13:28）、すなわち「麦の中に毒麦を」（マタ13:25）蒔いた者が。ゆえに、神は種を持ちながら傍に立ち、悪魔もまたそうしました。もし私たちが「悪魔に隙を」（エフェ 4:27）与えるなら、敵は天の父が植えなかった植物を蒔きますが、それは完全に根絶されるでしょう。もし悪魔に隙を与えず、神に隙を与えるなら、神は喜び、その種を私たちの支配的なもの〔心〕の上に蒔きます。それゆえに、エレミヤが何か悲しい贈り物を神から受け取ったのだと考えてはいけません。なぜなら、彼は「根絶するために、諸民族と諸王国の上に」（エレ 1:8）置かれたからです。神は善です、言葉を通じて悪いものを根絶し、敵対的な諸王国を天の王国を通じて根絶し、戦闘的な諸民族を神の民族を通じて根絶するのですから。

第15節

（ギリシア語）

「根絶し、破滅させること」（エレ 1:10）。悪魔の何らかの建物があり、神の何らかの建物があります。「砂の上の」（マタ 7:26）建物は悪魔のものです。というのも、それは堅固で、確固とした、統合されたものの上に立ってはいないからです。一方で、神の「岩の上の」（マタ 7:24以下）建物もあります。神の者たちに何が言われているかを見てください。「あなたがたは神の畑、神の建物である」（Ⅰコリ 3:9）。それに、神の言葉は「諸民族と諸王国の上に」あるのです、「根絶し、破滅させ、滅ぼすために」（エレ 1:10）。たとえ〔何かが〕根絶されても、その根絶されたものは〔完全に〕滅ぼされることはなく、存在します。たとえ〔何かが〕破滅させられても、破滅の石は〔完全に〕滅ぼされることはなく、破滅させられたものとして存在します。

（ラテン語訳）

悪魔の何らかの建物があり、神の何らかの建物があります。「砂の上」（マタ 7:26）に建てられたもの、これは悪魔のものです。というのも、それは何の上にも固定されておらず、また流産は強固にされてもいないからです。一方で、「岩の上」（マタ 7:24以下）に建てられたもの、これは神のものです。そしてそこから、彼の者たちに対しても次のように言われています。「あなたがたは神の畑、神の建物である」（Ⅰコリ 3:9）、「諸民族の上」で「根絶し、破滅させ、滅ぼすために」（エレ 1:10）。たとえ何かが根絶されても、その根絶そのものは〔完全に〕滅ぼされることはなく、引きちぎられたものは依然として存続します。たとえ家が崩されても、廃墟における石は無傷であり、家はばらばらにされたのであって、〔完全に〕滅ぼされたのではあ

天の父によって植えられたわけではない植物です。もしあなたがこれらの考えが誰の植物であるのか知りたいなら、このことを聞きなさい、「敵の人間がこのことをしたのだ」（マタ13:28）、すなわち「麦の中に毒麦を」（マタ13:25）蒔いた者が。ゆえに、見よ、神は傍に立ち、悪魔もまた傍に立ちました、種を持ちながら。もし私たちが「悪魔に隙を」（エフェ 4:27）与えるなら、敵は天の父が植えなかった植物を蒔きますが、それは完全に根絶されるでしょう。もし悪魔が拒否され、私たちが神に隙を与えるなら、神は喜び、その種を私たちの心の支配的なところの下に蒔きます。エレミヤが何か悲しい物を受け取ったのだと考えてはいけません。なぜなら、彼は諸民族と諸王国の根絶のために置かれたからです。これは神の善のしるしです、言葉を通じて悪いものを根絶すること、敵対的な諸王国を天の王国で破壊すること、そして戦闘的な諸民族を神の部族で滅ぼすこと。根絶し、破滅させること。

す。したがって、神の善が必要なのです、根絶されたものを〔完全に〕滅ぼそうと根絶した後には、また打ち滅ぼされたものを〔完全に〕滅ぼそうと打ち滅ぼした後には。滅ぼされたものや根絶されたものについて、そうしたものがどのように滅ぼされたのか、注意深く読んでください。「籾殻を消えない火で燃やしてください（マタ 3:12)。そして束を束ねてください、毒麦を束として。そしてそれを火に渡してください（マタ13:30)」。このようにして、それは根絶されたあとに〔完全に〕滅ぼされたのです。もしあなたが、破壊のあとに、質の悪い材料の建物の滅ぼされた部分を見たいなら、レプラのために打ち滅ぼされたあの家は塵となり、またそれは塵として「町の外に」（レビ14:40）投げ出されます、石が残ったままであることがないように。これは次のようにあるのと似ています、「通りの泥のように、私は彼らを取り除く」（詩17［18］:43)。というのも、より劣ったものは決して存在していてはならないからです。〔何かが〕破滅させられたら、石は、悪人が建てることができるような他の建物の役に立た〈ないように〉なっていなければなりません。〔何かが〕根絶されたら、ふたたび毒麦を蒔くために（マタ 13:25)、根絶させられたものからふたたび種を見つけてはいけません。というのも、どんな場合でも、毒麦の種を持っているとき、彼〔悪人〕はそれを蒔こうとしたからです。このことから、毒麦を束にしてそれを火に渡してください（マタ 13:30)、それが根絶されたあとに〔完全に〕滅びるために、そして悪魔の建物が破滅させられたあとに〔完全に〕滅びるために。

第16節

（ギリシア語）

しかし、神の言葉はこれらの中に立てられることはありませんでした、「根絶し、破滅させ、滅ぼすために」については。というのも、悪いものは私から根絶されるべきであり、劣ったものは破滅させられるべきだからです。いったいりません。したがって、神の寛大さが必要なのです、根絶そのものと破滅全体が滅びるために。根絶されたものがどのように〔完全に〕滅ぼされたのか、注意深く読んでください。「通りを消えない火で燃やしてください（マタ 3:12)。そして毒麦の束を束ねてください。そしてそれを火に渡してください（マタ 13:30)」。このようにして、根絶されたものは〔完全に〕滅ぼされたのです。もしあなたが、どのようにしてばらばらにされたものが無へと変えられたのかを知りたいなら、どのようにして建物の非常に質の悪い材料が塵へと粉々にされるのかを知りたいなら、レプラのために破壊されるように命じられたその家は、塵にされ、「町の外に」（レビ14:40）投げ出されます、石が決してそこからもとに戻ることがないように。これは次のように書かれているのに従ってのことです、「通りの泥のように、私は彼らを消し去る」（詩17［18］:43)。というのも、確かに悪徳は完全に消滅しなければならないからです。何かが破滅させられたら、破壊されたその石そのものも粉砕されるべきです。それは、悪魔が準備できるようなどんな建物も利用されることがないようにするためです。何かが根絶されたら、敵は根絶されたものの間にさえ、彼がふたたび蒔くであろう何かの種を見つけます。このことから、主は命じて言っています、「それを集めて、火で焼き尽くしなさい」と。すなわち、悪魔の根絶も、その破滅そのものも〔完全に〕滅ぼされるために。

（ラテン語訳）

しかし、神の言葉はこれらの中に立つだけではありませんでした、「根絶し、破滅させ、滅ぼすために」。というのも、次のようにあるべきです。私の中にある悪いものすべては根絶されるべきであり、劣ったものは破滅させられ、そし

何が私にとって助けとなるでしょうか、もし根絶されたものより前に、より優れたものが植えられないなら。いったい何が私にとって助けになるでしょうか、もしこれらのものより前に、優れたものが再建されないなら。このことゆえに、神の言葉はまず「根絶し、破滅させ、滅ぼす」ことを必然的に行い、その後で「〈建て、〉そして植えた」（エレ 1:10）のです。そして聖書において常に、私たちは悲惨であるように見えること ── そのように私は呼ぶことにしましょう ── が最初に呼ばれ、それから喜ばしいように見えることが第二に述べられることを見ました。「私は殺し、そして命を作る」（申32:39）。〈彼は「私は命を作る」と言って、その後に「私は殺す」と言ったわけではありません。〉というのも、神が命を作ったものが、自分自身によって、あるいは他の誰かによって殺されることは不可能だからです。そうではなく、「私は殺し、そして命を作る」のです。一体誰を私は殺すのでしょうか。裏切り者としてのパウロを、迫害者としてのパウロを〔殺すのです〕。そして私は命を作ります。それは、パウロがイエス・キリストの使徒になるためにです（Ⅱコリ 1:1）。もし異端ゆえにみじめな者たちがこれらのことを理解していたなら、彼らは次のようなことを絶えず私たちに持ってきて言いはしなかったはずです。すなわち、「律法の神がいかに荒々しく非人間的であるかを知りなさい。また彼が〔どのように〕『私は殺し、そして命を作る』と言った〔のかを知りなさい〕」などと〔言いはしなかったはずです〕。あなたは聖書の中に死者たちの復活の約束を見ないのですか。あるいは死者たちの復活がすでに一人ひとりに予兆されていたのを知らないのですか。「私たちは洗礼によってキリストと共に葬られ、彼と共に立ち上がった」（ロマ 6:4 、コロ 2:12も参照）。

したがって、より悲惨だが必要な声から彼は始めるのです、たとえば「私は殺す」のように。その後に殺した上で、「そして私は命を作る。私は傷つけ、そして癒す」（申32:39）のです。「とて滅ぼされるべきだからです。いったい何が私にとって助けとなるでしょうか、もし根絶され、また下から突き刺されたものより前に、より優れたものが私の中に植えられないなら、また再建されないなら。このことゆえに、神の言葉はまず必要なことをするのです、〔すなわち〕「根絶し、破滅させ、滅ぼす」のです。そしてその後で「建て、そして植えた」（エレ 1:10）のです。そして聖書において常に、私たちはまず悲惨と呼ばれているように見えることを、それから喜ばしいことを見ました。次のように言われているように、「私は殺し、そして命を作る」（申32:39）。彼は最初に「私は命を作る」と言って、その後に「私は殺す」と言ったわけではありません。というのも、かつて神が命を作ったものが、自分自身によって、あるいは他の誰かによって殺されることは不可能だからです。そうではなく、「私は殺し、そして命を作る」のです。それは、パウロがキリスト・イエスの使徒になるためにです（Ⅱコリ 1:1）。もしみじめな異端者たちがこれらのことを理解していたなら、彼らは次のようなことを絶えず私たちに持ってきて言いはしなかったはずです。すなわち、「律法と預言者たちの神がいかに荒々しく非人間的であるかを、〔また〕彼がどのように『私は殺し、そして命を作る』と言ったのかを知らないのですか」などと〔言いはしなかったはずです〕。〔異端者たちは〕聖書の中にある死者たちの蘇りの告知に注意を払っておらず、復活がすでに一人ひとりに始まっていることを考察していません。「というのも、私たちは洗礼によってキリストと共に葬られ、彼と共に立ち上がった」（ロマ 6:4 、コロ 2:12も参照）。

常に悲惨だが必要なものから神は始めるのです、たとえば「私は殺し、そして命を作る。私は傷つけ、そして癒す」（申32:39）、「というのも、主は愛する者を叱責し、受け入れた子を皆鞭打つ」（ヘブ12:6）のように。そしてこれらのあとに彼は癒すのです。「というのも、彼は痛みをもたらし、ふたたび喜びを回復させる」（ヨ

いうのも、主は愛する者を教え、受け入れた子を皆鞭打つ」（ヘブ12:6）からです。最初に彼は傷つけ、そのあとに癒します。「というのも、彼は痛みをもたらし、ふたたび回復させる」（ヨブ5:18）からです。次の箇所でも同様です。「私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、破滅させ、滅ぼし、再建し、植えるために」（エレ1:10）。しかしながら、悪いものが私たちから〈取り〉除かれることが先決です。神は悪い建物の場所に〔何かを〕建てることはできません。「というのも、義と不法にどんな関与があるだろうか。闇に対して光にはどんな交わりがあるだろうか」（Ⅱコリ6:14）。悪が基から根絶されることが必要です。悪の建物が私たちの魂から使い果たされることが必要です。それは、その後で言葉が建て〈、そして植える〉からです。というのも、私は「見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた」（エレ1:9）と書かれていることを他のやり方で理解することはできないのです。言葉は何をするのでしょうか。それは「根絶し、破滅させ、滅ぼすこと」（エレ1:10）です。言葉は「諸民族を」根絶し、言葉は「諸王国を」破滅させるのです〈、しかし〉それは肉体的かつ地上的なこの〈諸王国ではありません〉。言葉は〔言葉に〕相応しく破滅させ、言葉は〔言葉に〕相応しく根絶させるので、言葉によって根絶させられたものを理解し、言葉によって破滅させられたものを理解してください。ちょうど今言われたことの中に力がなかったでしょうか、もし神が「主は、大きな力で良い知らせを告げる者たちのために、言葉を与えてくれるだろう」（詩67［68］:12）という一節に従って与えるなら。〔その力とは、〕根絶する力です、もし何らかの不信仰や、何らかの偽善や、何らかの悪意や、何らかの不品行があるときに。破滅させる力はないのでしょうか、もし偶像をまつった神殿が心の中のどこかに建てられたときに。それは、それ〔偶像の神殿〕が滅ぼされた後で、神の神殿（Ⅰコリ3:16、Ⅱコリ6:16）が建てられるため、また神の栄光が再建ブ5:18）からです。今の箇所でも同様に主は言います。「私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、突き刺し、滅ぼし、再建し、植えるために」（エレ1:10）。しかしながら、悪いものが私たちから取り除かれることが先決です。神は悪い建物の場所に〔何かを〕建てることはできません。「というのも、義と不法にどんな関与があるだろうか。闇に対して光にはどんな交わりがあるだろうか」（Ⅱコリ6:14）。悪が最下部の基から根絶されることが必要です。悪の建物もまた私たちの魂から徹底的に取り去られることが必要です。それは、その後で言葉が建て、そして植えるからです。確かに、私たちは「見よ、私はあなたの口に私の言葉を与えた」（エレ1:9）と書かれていることを他のやり方でも理解することができるのです。そしてそれは言葉が何をするのか言います、それは「根絶し、突き刺し、滅ぼすこと」（エレ1:10）です。言葉は「諸民族を」根絶し、言葉は「諸王国を」突き刺すのですが、それは破壊に相応しい肉とこの世の諸王国ではなく、言葉による根絶に相応しい諸王国なのです。根絶され破滅させられたものを考えてください。ちょうど私たちが言っていることに、主が与えてくれる力がないと思いますか、次のように書かれていることに従って、「主は、大きな力で良い知らせを告げる者たちのために、言葉を与えてくれるだろう」（詩67［68］:12）。根絶し、突き刺す力は、もし何らかの不信仰や、何らかの虚偽や、何らかの悪意や、何らかの贅沢や、何らかの不和があっても、突き刺されることはありません。もし偶像が心の中に建てられているなら、それが倒された後で、神の神殿（Ⅰコリ3:16、Ⅱコリ6:16）が建てられ、彼の栄光がその中に見出されますように。それは不毛な、あるいは起き上がる神聖な木立（エレ3:6）ではなく、楽園（創2:8）の植えられた植物（マタ15:13）となりますように。その楽園では神の神殿がキリスト・イエス――「その栄光と支配は永遠のうちの永遠の中にある」（Ⅰペト4:11）――の中にあり

された神殿に見出されるため、そして「木立」（エレ 3:6）ではなく、「神の楽園」（創 2:8）の「植えられた植物」（マタ 15:13）となるためです。その楽園では神の神殿がキリスト・イエス――「その栄光と支配権は永遠のうちの永遠にある」（Ⅰペト 4:11）――の中にありますように。アーメン。

ますように。アーメン。

注

本研究は JSPS 科研費 JP23K12148の助成を受けたものである。

1 John A. McGuckin (ed.), *The Westminster Handbook to Origen* (Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 2004), 25-44.

2 オリゲネス主義論争については、Elizabeth A. Clark, *The Origenist Controversy: The Cultural Construction of an Early Christian Debate* (Princeton: Princeton University Press, 1992).

3 ヒエロニュムスとルフィヌスの関係については、加藤哲平『ヒエロニュムスの聖書翻訳』教文館、2018年、53-59頁。

4 Henri Crouzel, *Origen* (trans. A.S. Worall; Edinburgh: T. & T. Clark, 1989 [1985]), 42.

5 Gustave Bardy, *Recherches sur l'histoire du texte et des versions latines du* De Principiis *d'Origène* (Mémoires et travaux 25; Paris: Champion, 1923).

6 Lorenzo Perrone, Marina M. Pradel, Emanuela Prinzivalli, and Antonio Cacciari (eds.), *Die neuen Psalmenhomilien: Eine kritische Edition des Codex Monacensis Graecus 314* (GCS Neue Folge 19 = Origenes Werke 13; Berlin: De Gruyter, 2015).『詩編説教』に基づいて翻訳者としてのルフィヌスを再評価した先駆的な研究として、Emanuela Prinzivalli, "A Fresh Look at Rufinus as a Translator," in *Origeniana Undecima: Origen and Origenism in the History of Western Thought*, ed. A.-Ch. Jacobsen (Leuven: Peeters, 2016), 247-75.

7 Bardy, *Recherches*, 154-202; Henri Crouzel, "Jérôme traducteur de *Peri Archôn* d'Origène," in *Jérôme entre l'Occident et l'Orient: XVIe centenaire du depart de saint Jérôme de Rome et de son installation à Bethléem. Actes du Colloque de Chantilly* (*septembre 1986*), ed. Yves-Marie Duval (Paris: Études Augustiniennes, 1988), 153-61.

8 オリゲネス研究におけるラテン語訳の使用の変遷について、Joseph T. Lienhard, *Origen, Homilies on Luke, Fragments of Luke* (FC 94; Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 1996), xxxvi.

9 Pierre Nautin (ed.), *Origène, Homélies sur Jérémie*, I (SC 232; Paris: Cerf, 1976), 15-99.『エレミヤ書説教』の英訳としては、John C. Smith, *Origen, Homilies on Jeremiah and 1 Kings 28* (FC 97; Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 1998).

10 Antonio Grappone, "Annotazioni sulla cronologia delle omelie di Origene," *Augustinianum* 40 (2001): 27-58, esp. 48.

11 Erich Klostermann, *Die Überlieferung der Jeremiahomilien des Origenes* (TU 16/3; Liepzig: Hinrichs,

1897), 19. 一方で Pierre Nautin は、『エレミヤ書説教』の翻訳を、375年以前のアンティオキアにおいてだったと考える。*Origène, Homélies sur Jérémie*, I, 33.

12　Marcel Borret (ed.), *Origène, Homélies sur Ézéchiel* (SC 352; Paris: Cerf, 1989), 30-33.

13　W.A. Baehrens, *Überlieferung und Textgeschichte der lateinisch erhaltenen Origenshomilen zur alten Testament* (TU 42/1; Leipzig: Hinrichs, 1916), 207-31.

14　表は以下を参照。Nautin (ed.), *Origène, Homélies sur Jérémie*, I, 33; Alfons Fürst and Horacio E. Lona (eds.), *Origenes, Die Homilien zum Buch Jeremia* (OWD 11; Berlin: De Gruyter, 2018), 12.

15　Klostermann, *Überlieferung der Jeremiahomilien*, 23.

16　Theodore A. Bergren, Robert A. Kraft, and Benjamin G. Wright III, "Jerome's Translation of Origen's Homily on Jermiah 2.21-22 (Greek Homily 2; Latin 13)," *Revue Bénédictine* 104 (1994): 260-83.

17　Fürst and Lona (eds.), *Origenes, Die Homilien zum Buch Jeremia*, 25-28.

18　Nautin (ed.), *Origène, Homélies sur Jérémie*, I, 34.